

Initial Consonant Cluster

の安定度について

辻 前 秀 雄

ことばは本質的には個人において存在するものであり、音声という記号 (symbol) を媒介とする表現行為である。同時にそれは話し手と聞き手という相互関係において成立する伝達行為であり、両者の間に伝達——表現と認知——が果されるためには伝達手段である音声に相互理解を可能にする一定の法則性がなければならない。「ウマ」という言語記号は物理的存在である音声によって外的に知覚されても、音声そのものは何ものをも意味しない。「ウマ」という記号と表象されるものの間には本質的な関連はない。両者の関係、すなわち記号と実体、音声と意味とは無縁 (immotivé) であり、恣意 (arbitraire) である。

伝達行為としての言語行動はまた社会的である。ある言語体系はある特定の集団においてのみ意味をになっている。「ウマ」という言語記号が伝達の機能を果しうる集団にあっては *cheval* とか *Pferd* という言語記号は全く異質である。ことばはある特定の言語共同社会において相互理解を可能にする習慣行為である。音素体系あるいは音素構造への着目はこの言語の記号性と社会性に根拠をもつ。ある集団でことばが成立するためには記号としての法則性ないしはその社会の **agreement** が存在しなければならない。それは無限の音連続である現実の発話が有限の単位要素の結合より成り立つ構造体 (structure) として説明可能であり、記述できるということを意味する。音素はその目的で設立された最小音単位である。

われわれの分野は子音連結を取り扱うという点で広く音素配列論 (phonotactics) に属する。しかしここでの主題は英語ですでに設定された音素体系

の上に立ち、その安定性という視点で音結合を考察することである。指向するところは英語のCVC構造の究明にあるので、本稿では便宜上一音節語を中心とし、initial は語頭というわくで論議を進めることとする。

頭子音連結を特に対象とする根拠については、(1)伝達手段としての言語記号は initial において最も効果的に認知機能を助けるであろう、(2)そのために頭子音は尾子音に比してより正確な記述が可能であり、記号としての固定度が強いであろう、(3)特に子音連結はその言語社会の特性、ひいてはその言語構造の法則性を最も強く発揮するであろう、という前提にあるといえる。さらに結合の「安定度」ということは個人において存在する言語の流動性と相容れないと考えられるかもしれない。しかしながらそれは「英語らしさ」とは何かを究明する一つの尺度として取り上げられねばならないと考えるのである。¹⁾

1

子音音素は英音の場合も米音の場合も半母音を含めて24である。いま Gleason (*Introduction*, p. 24) にもとづいて米音の子音体系を表示すると次のとおりである(図表1)。

図表中特に問題となるのは /h/ と半母音 /w r y/ についてであるが、そのことに関しては後述する。要するに英語頭子音連結はこれら24の子音が2個ないし3個結合して英語の特色であるCVC構造の initial を形成することである。英語における音素配列の型は Trnka の統計 (cf. Kruisinga, *Structure*, pp. 24 f.) によれば一音節語で、

- | | | |
|------------------|-----|-------|
| (1) 核音のみから成るもの | V型 | 0.31% |
| (2) 核音の後に子音のくるもの | VC型 | 2.92% |

1) 本稿はその基盤として、「英語らしさ」の概念分析をも含め、Yasui, *Consonant Patterning in English* (Kenkyusha, 1962) に負うところが大きい。

なお言語資料については英米両音素にわたりすでに設定記述されている資料、ならびに D. Jones 13版 (1967) および Kenyon-Knott 両発音辞典によることとした。

図表 1

	Bilabial (両 唇)	Labiodental (唇 歯)	Dental (歯 間)	Alveolar (歯 茎)	Alveolarpalatal (歯茎口蓋)	Velar (軟口蓋)	Glottal (声 門)
Stops (閉鎖音)	p b			t d		k g	
Affricates (破擦音)					tʃ dʒ		
Fricatives (摩擦音)		f v	θ ð	s z	ʃ ʒ		h
Lateral (側 音)				l			
Nasals (鼻 音)	m			n		ŋ	
Semivowels (半母音)	w			r	y		

(3) 子音の後に核音のくるもの C V型 9.84%

(4) 核音の前後に子音のくるもの C V C型 87.0%

となり、V型の語の絶対数は10、VC型は75、CV型は371と算定している。したがって最後のCVC型が圧倒的に多く、英語における音素結合を音節の構成要素としてみれば、このCVC体系こそ閉音節構造の中でも最も典型的な英語の特徴といえる。

いまCVC型の一般公式を C_iVC_f で表わせば C_i (=C-initial) は3子音連結すなわち $C_3C_2C_1$ —まで、 C_f (=C-final) は4子音連結すなわち— $C_1C_2C_3C_4$ —まで起りうる。¹⁾ そのうち C_1V —すなわち単子音+母音の型については詳細は省略するが、英語では /ʒ/ /ŋ/ が語頭にあらわれないこと、 /ð/ と /z/ の分布に制限がある²⁾ ことを除いて大部分の結合がみられる。

(C_3) C_2C_1 —構造については Fries(*Teaching*, pp. 17 f.) は2子音で34種、

1) C_iVC_f は厳密には C(C...) V(S) C(C...) である。C(C...) は単子音または子音連結、V(S) は母音または母音+半母音から成る核音 (nucleus)を示す。(cf. 太田朗「米語音素論」研究社, 1956, pp. 145 f.)

2) /ð/ の分布は比較的まれで *this, that, then, thus* など文法的機能語に限られる。/z/ もまれで本来語としては語頭にあらわれず、*zeal, zest, zone* など Gk. 系の語が多い。

3子音で5種、合計39種¹⁾をあげている。いままず頭2子音連結を表示すると、大別して、(a) C_1 が /l w r y/ になるもの (図表2), (b) C_2 が /s/ になるもの (図表3) とがある。

図表2

C_1/C_2	l	w	r	y
p	pl <i>pluck</i>		pr <i>prick</i>	py <i>puke</i>
b	bl <i>bliss</i>		br <i>bread</i>	by ☆ <i>bugle</i>
t		tw <i>twin</i>	tr <i>trade</i>	
d		dw <i>dwelt</i>	dr <i>dream</i>	
k	kl <i>clean</i>	kw <i>quick</i>	kr <i>crowd</i>	ky ☆ <i>cube</i>
g	gl <i>glad</i>		gr <i>green</i>	
f	fl <i>flood</i>		fr <i>fresh</i>	fy <i>few</i>
v				vy <i>view</i>
θ		θw <i>thwack</i>	θr <i>thrice</i>	
ʊ				
s	sl <i>slip</i>	sw <i>sweat</i>		
z				
ʃ			ʃr <i>shrill</i>	
ʒ				
h		hw <i>what</i>		hy <i>hew</i>
l				
m				my <i>mew</i>
n				

1) Yasui (*Patterning*, pp. 6-7.) では子音連結が完全なまでに記述され、頭子音で2子音連結は34 (Fries と同数)、特殊なものを含めて総計54が表示されている。なお同書で Gleason で34, Trager-Smith で40と付記されている。

図表 3

C ₂	C ₁		
	p	sp	<i>speak</i>
	t	st	<i>stick</i>
	k	sk	☆ <i>skin</i>
	f	sf	<i>sphere</i>
s	l	sl	<i>slip</i>
	m	sm	<i>smell</i>
	n	sn	<i>sneak</i>
	w	sw	<i>sweat</i>
š	r	šr	<i>shrill</i>

(注) ①図表2, 図表3の例語は単音節の本来語をあげるようにしたが, ☆*bugle* (F.-L.) ☆ *Cube* (F.-L.-Gk.) ☆*skin* (Scand.) はこの頭子音連結で本来語なきもの。
 ②図表3のうち /sl/ *slip* と /sw/ *sweat* は図表2と重複している。

次に頭3子音連結は英語における C_i の最大数である。これは図表2の無声閉鎖音 /ptk/ と /l w r y/ の連結の前に /s/ が起る場合, すなわち /s/ + /ptk/ + /lwry/ の組合せであるが, Fries で実際に起るのは次の5種である。

図表 4

C ₃ C ₂ \ C ₁	/l/	/w/	/r/	/y/
sp	<i>splash</i>		<i>spread</i>	
st			<i>strong</i>	
sk		<i>squeeze</i>	☆ <i>screen</i>	

(注) /skr-/ は上例の ☆*screen* のように F.-L. 系か *scream* のような Scand. 系のいずれかといっていい。

Fries をいちおうの手がかりとして, 以上英語の頭子音連結を表示した。ここで図表にもとづいて頭子音連結, さらに広くは英語子音配列の一般法則ならびに各分布ごとの法則性を検証すべきである。しかしながらこの分野に関してはすでに完全なまでの記述が行なわれているので (cf. 太田朗「米語音素論」pp. 151 f.), ここではただ一般論的に主な法則性を要約するととどめ, 必要に応じ, そのつど検討することとする。まず英語における子音連結一般の法則としては,

- (1) 同一子音が連続してあらわれることはない。
- (2) せばめ音（有声／無声の対立する音）では有声は有声，無声は無声とのみ連結する。
- (3) 半母音は母音に隣接しておこる。
- (4) せばめ音は一番外側におこる。

頭子音連結については以上の一般法則の外に、

- (5) /č j ž ŋ/はおこらない。
- (6) 同種の2子音（閉鎖音，摩擦音，半母音ならびに/l m n/のそれぞれ2音）があらわれることはない。
- (3) 3子音連結では C_2C_1 または C_3C_2 に分解でき，その2子音連結がそれぞれ存在しているものでなければならない。

実際にはいくつかの例外や問題点があり，また図表でみられるように法則に合致しながらも多くの空所が存在する。

われわれはいま法則性ということばを用いてきた。このことは音素配列論ではきわめて重要な概念であり，音素記述に必須の前提である。そこでまず配列の有限性という問題から関連して論を進めていくこととする。さきにわれわれは英語の子音音素を24と固定したところから出発した。まずこれを前提としても，理論的には $24 \times 24 = 576$ の C_2C_1 一群が可能なはずである。そのうち実際に生ずるのはわずかに34（5.9%）ということである。頭3子音に至ってはさらに著しく，理論的に 24^3 で13,000以上の組合せが可能な計算になるが，実際には10内外である。ここで方言や一部の話者にのみあらわれる特殊な連結をも含め，いわゆる周辺部をもできるだけもうらしてみよう。そのためには Jones や Kenyon-Knott に取り上げられているもの，あるいは Hockett (*Course*, p.87) などにあげられているものなどを中心に，図表2の精密表を図式化してみる。

図表 5

$C_2 \backslash C_1$	l	w	r	y	p	t	k	f	v	θ	s	z	m	n
p	⊙	•	⊙	⊙		•		•			•			•
b	⊙	•	⊙	⊙										
t		⊙	⊙	●							•		•	
d		⊙	⊙	●					•			•		•
k	⊙	⊙	⊙	⊙									•	•
g	⊙	•	⊙	•								•		•
f	⊙		⊙	⊙						•				
v	•	•	•	⊙										
θ		⊙	⊙	•										
ð														
s	⊙	⊙		●	⊙	⊙	⊙	⊙	•	•			⊙	⊙
z	•	•		•										
h		●		⊙										
š	•		⊙										•	•
ž														
l				●										
m		•		⊙										•
n		•		●										

図表 5 で ⊙ 印が Fries の 34種¹⁾ であるがこの段階で /hw-/ を広く方言分布という意味で、 $C_2 + /y/$ の場合と同様、●印とした。●印は Jones と

1) Fries と Yasui, *Patterning*, p. 8 の図表の+印が数的に同じであることは前にふれたが (p.56 fn.), 後者では /hw/ が (+), 代わりに /dy/ が+となっている。本稿のこの段階では Fries から /hw/ を一段さげることとした。

Kenyon-Knott で相違のある部分で、広く方言に生ずると考えられるものである。さらに・印は特定の話者のもつきわめてまれな配列で、英語の子音連結で生じないとされているものでも、いちおう資料として得られたものを表示した。¹⁾ したがって数字的には◎印が33, ●印が6, ・印が33, 総計72種となる。

例語は必要に応じてあげることとし、次に頭3子音連結を上図表と同じ要領で図式化すると次のとおりである。

図表 6

C ₃ C ₂ \ C ₁	l	r	y	w
sp	◎	◎	・	
st		◎	●	
sk	・	◎	・	◎
sf		・		
sm		・	・	
pf			・	
hw		・	・	

図表 6 では Fries にあるもの 5 (◎印), 方言にあるもの 1 (●印), 特殊語 7 (・印) の計 13 種をもうらした。

以上でわれわれはいずれ本稿の過程で消去されると予想するものまで含めて、全資料を提示したわけである。われわれの指向するところは音素配列における将来の可能性ないしは蓋然性までふまえた余すところなき記述にあるのではない。ある意味ではむしろ逆の方向に英語的でないものを消去し、「不安定」なものをふるいわけ、英語として最も安定し

固定したものを選別しようとする。図表 5, 6 で太い実線でかこんだ部分が最終的な対象となっていくであろう。そのためにはいかなる基準を設け、いかなる方法をとるべきかが問題となる。

2

前章において音素の有限性ということと、その配列の規則性ということに

1) なおこの外に・印では /čy/ /jy/ を *chew*, *juice* でもつ話者があると Fries (p. 18 fn.) にあげられ、Yasui (p. 8) でも (+) で表示されているが音の性質上これを省略した。さらに、Hockett (p. 87) で /t/ *Tlingit*, Jones で /ŋg/ Nagami [ŋgá:mi, ɲá:mi] が発見されるがあえて無視することとした。

ふれた。もとより人間はほとんど無限といえる音を発することができる。われわれは英語の話者がわずかに24の子音と9の母音¹⁾しか発しえないと錯覚してはならない。客観的に耳にとらえられるものだけでも、たとえば *tick, stick, trick, better, utmost, beaten, beetle, eighth* における [t] はそれぞれ特定の音環境におこり、すべて異なった言語音で、音声分析の段階では $t_1 t_2 t_3 t_4 t_5 t_6 t_7 t_8$ と区分されねばならない (cf. Firth, *Papers*, p.21 fn.)。音素 /t/ はこれらすべての t 音族の総称であり、グループ名である。Pike (*Phonemics*, p. 58) は “Sounds tend to be modified by their environments.” という大前提から彼の音素設定の手順を決定している。厳密には /t/ が音環境によって「変容」していくのではなく、むしろ現実にあるのは $t_1 t_2 t_3 \dots$ によって転写された言語音自体であり、/t/ はそれら無限の音連続の中からの抽象であるともいえる。われわれがいま配列の有限性というとき、この音素的体系としての有限性をいっているのであり、音声構造との関係を認識しなければ、いたずらに数字の魔術におちいるであろう。

さらに底辺を押しひろめて、大人と子供、男子と女子、日本人と欧米人などの声の相違ということも問題となるであろう。しかしこれらの点に関してはすでに Jespersen (cf. *Mankind*, p. 187) が生理的基盤は全人類に共通であり、発音器官は全人種を通じて同様に形成され、そのわずかな相違はなんら言語的重要性はなく、解剖学的原因に帰しうる言語的特徴を指摘したものはかつてない、と立証している。

われわれの目指す配列の安定度 (stability) はこれらの広い、限らない現実の音声資料の中からすでに記述可能とされ、体系づけられた音素配列の有限性ということを前提としている。英語のもつ39 (と仮定して) の頭子音連結はこの意味で有限であり、極めて少い配列数といえる。またそのゆえにこそ安定度という一見無暴な観点が成り立つのであり、また何よりもそれゆえ

1) 英語の母音音素の体系は複雑で容易に本稿の対象とはなりえないが、Trager-Smith, *Outline*, p. 27や、前記 Gleason, *Introduction*, p. 35 により、米語母音音素を /i e æ i ə a u o ɔ/ の9個とする。

にこそ、伝達記号としての initial¹⁾ の機能が發揮されるのである。

記号体系としての有限性ということから、まずこれらが用いられる頻度ということも無視すべきではない。音素論ないしは音素配列論の立場では頻度という概念は受けいれられないであろう。しかし、いま記述された音素体系を手中にして、真に「英語らしい」記号として、可能な限り overall な伝達媒介として現実の言語社会に還元する立場というものを予想してみる。ほとんどあらわれることのない記号、極めて特殊な話者しか発しない連結音はたとえそれらが英語に異質なものでなくとも、その言語社会に定着していると言えないであろう。そこで連結の頻度ということも重要な契機であると考えるので、この点をいくつかの面から考察してみる。

われわれは日本語と極めて対照的であるという点で、英語のもつ典型的な閉音節構成から子音特に子音連結に着目し、子音の占める位置を解明したいと考えるのであるが、音素論においては「なぜ」という問いに対してはなんらの答も帰ってこないようである。「安定度」という尺度への概念規定を急がないのもそのためで、原則を、あるいは事実を叙述することから可能なかぎりに帰納していこうとするわけである。まず Bloomfield (*Language*, p. 137) は教材中の全音素数を 100% として、子音音素の頻度を%で示した表をあげている。

図表 7

n	7.24	ð	3.43	p	2.04	g	.74
t	7.13	z	2.97	f	1.84	j	.60
r	6.88	m	2.78	b	1.81	tʃ	.52
s	4.55	k	2.71	h	1.81	dʒ	.44
d	4.31	v	2.28	ŋ	.96	θ	.37
l	3.74	w	2.08	ʃ	.82	ʒ	.05

1) 本稿では initial との関連を主体とするので、中間子音、尾子音の連結にふれないと思うが Fries は尾子音連結として屈折語音を加えて総計151の配列をあげている。(cf. *Teaching*, pp. 18—20)

母音については彼は“too confused”で簡単には計数できないが、最も頻度の高い/e/で8%以上、次が/iy/の6%以上、/e/が3.5%くらいと付記している。子音頻度の総数が60%を越えること、逆に音節中に成節子音を除いては必ず母音を含みながら、その最高の/e/が8%ということから、英語子音の占める率というものが特色づけられる。安井教授の「英語学研究」(p. 104)には G. Dewey の2子音連結頻度表が引照されているが、次にかかげる表は2種類の文学作品を教材として試みた頭子音連結の頻度表である。一方は Maugham, *Liza of Lambeth* (1897), 他方は Salinger, *The Catcher in the Rye* (1951) である。年代は多少開きがあるが、前者が平明な文体と用語を駆使する Maugham の赤裸な“Cockney world”の描出であり、後者は20世紀後半のアメリカ口語を代表するといわれ、戦後のアメリカ青年の言動を生々しく描いているものとして語学的にも興味があったからである。ただ特定の教材を選んだこと、両者に総語数の上でかなりの差があること、さらには Bloomfield の警告のように印刷された文字を音素と混合することを恐れて、/hw/あるいはC₂+/y/の連結は頻度表から除外したことなどで信頼度は疑わしいが、反面いくつかの興味ある結果も得られた。

図表8で頻度に%の欄を加えたのは両者の母集団の相違が大きく、比較し難いので、それぞれの連結総和を100%として比率で示したものである。興味あることは/st/が両者に差はあるにしても予想された/pr/や/tr/に比して圧倒的に多かったこと、同様に3子音として/str/が高率を占めたことである。さらに/st/ではMaughamでは*still* (32), *stand* (31), *stood* (24), *start* (22)だけで総頻度の半分を占めたこと、Salingerでは*start* (190), *stuff* (95), *still* (73), *stand* (49), *stop* (47)で/st/の60%を占めていることは重要である。¹⁾ /str/は頭3子音を代表することは予想されていたが、MaughamではVere Streetが物語の舞台であったこと、Salingerでは主

1) なお Jones で最高の語数をもつ/pr/ (700語、/st/は490語)も特に Salinger において、語数29、頻度も *pretty* (116), *probably* (82), *practically* (43)の3語のくり返しで/pr/の78.5%を占めていることも興味深い。

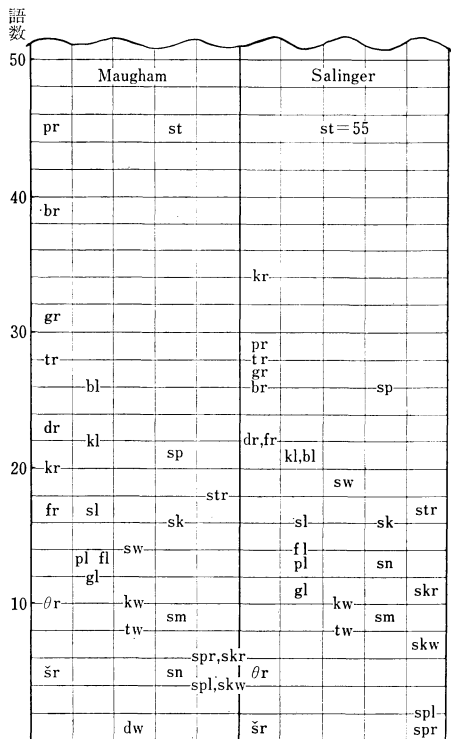
図表 8

	頻 度				語 数	
	Maugham		Salinger		M	S
p r	103	5.6%	307	9.0%	45	29
t r	94	5.1	177	5.2	28	28
k r	88	4.8	251	7.4	20	34
b r	144	7.5	153	2.4	39	26
d r	137	7.4	164	4.8	23	22
g r	127	6.9	67	2.0	31	27
f r	43	2.3	144	4.2	17	22
θ r	24	1.4	66	1.9	10	5
š r	9	0.5	3	0.09	5	1
p l	68	3.7	142	4.2	13	13
k l	69	3.7	106	3.1	22	21
b l	138	7.5	80	2.4	26	21
g l	28	1.5	53	1.6	12	11
f l	29	1.6	86	2.5	13	14
s l	57	3.1	54	1.3	17	16
t w	11	0.6	40	1.2	8	7
k w	83	4.5	128	3.8	10	10
d w	1	0.05	0	0.0	1	0
s w	36	1.9	65	1.9	14	19
s p	78	4.2	100	3.0	21	26
s t	218	11.8	745	21.9	45	55
s k	46	2.5	143	4.2	16	16
s f	0	0.0	0	0.0	0	0
s m	34	1.9	77	2.3	9	9
s n	9	0.5	47	2.0	5	13
s p r	12	0.6	2	0.06	6	1
s p l	6	0.3	3	0.09	4	2
s t r	138	7.5	166	4.9	18	17
s k r	17	0.9	15	0.4	6	11
skw	6	0.3	14	0.4	4	7
計	1,853	100%	3,398	100%	488	483

人公と同室の悪童が **Stradlater** で彼の名が全篇通じて約90回も繰返されたことにもよる。

次表は図表 8 を結合別にグラフにしたもので、図表 5, 6 の太線内の縦の線がある程度結合度という点で立証している。

図表 9



図表 9 では $C_2 + /r/$ とくに閉鎖音 + $/r/$ の分布が上位で均衡していること、特に **Bloomfield** が前記の子音頻度表で $/ptk/ : /bdg/$ の対立子音にあってはそれぞれ無声子音が有声子音より頻度が高いと立証したことをほぼ裏書きしている。¹⁾

その他の結合については検証を省略するが、われわれは頻度の高率なものを中心に、それらがすべて図表 5 の太線内に含まれ、また C_2 もしくは C_1 によって結合度に相対的な差異があることなどを立証し

ようとした。

ここで焦点を頻度の低いものに転ずると、図表 8 で表示されていない結合については、ただ **Salinger** で $/šm/$ *Schmidt* が 4 回あらわれた以外は皆無であった。両作品あわせて総語数は概数 10 万語に近いと考えられるので、図表 5, 6 の太線外の・印はもはやこのあたりで無視できるであろう。わく内

1) **Maugham** における $/kr/ : /gr/$ だけ例外となった。ただ頻度のグラフは紙面の関係で割愛したが、**Maugham** の方で $/br/ /dr/ /gr/$ がすべて $/pr/ /tr/ /kr/$ を上まわった(図表 8 参照)ことは皮肉である。

の領域についても・印は同様一度も生じなかったが、この中に *gules*, *Zeus*, *svelte* を含んでいるので、この3種は次章まで残すことにして、後は直輸入の外来語、あるいは固有名詞であるので、わく外と同じく、ここで消去していいであろう。さらに●印についてはここでは検証できないが、◎印のうち /sf/ が両作品通じて一度も生じなかったこと、/dw/*dweller* が *Maugham* で一回だけあらわれたこと、/šr/も頻度の低いこと、頭3子音は/str/を除いては極めて低いことなどを確認しておきたい。

3

音素論の分野にあっては自然科学ないしは社会科学における組織の構成と分析の原理が導入され、科学的記述と分析が厳しく規制されている。広く言語学の分野にして、そこでは「語」あるいは「意味」という概念も手離しては持ちこみを許されない。安定度という漠然とした概念はこの意味ですでに端緒にして異質であったといえる。しかしここではある意味で科学的分析と逆行しつつ、流動することばを捕らえ、いわば共時的立場と通時的立場の接点に立って、英語のもつ音韻構造を位置づけたいわけである。安定度とはそのための一つの尺度であり、英語の音韻体系を独自のもの、固定したもの、深く英語社会に定着したものとして見究めようとする。

この視点からわれわれはさきに音素配列の法則性ということにふれた。言語社会における伝達記号の法則性ということは以上の視点から最も重要な契機である。いまこの問題を中心に、英語の音素的構造そのものを音声的特徴との関係において検討してみる。しかしながらすでに指向してきたごとく、ここでいう音素構造の安定性とは必ずしも Jones(cf. *Phoneme*, ch. 27, 28) のいう *Diaphone* や *Variphone*¹⁾ と直接関係がない。

1) *Diaphone* は *Southern English* に見られる *get* の /e/ の *variety*, *Variphone* は日本語の「コレ」*kore* の /r/ が個人語においてもあらわれる *variety* をいう。いずれも「不安定」といえるが本稿でいう安定度はこのような音声環境を基盤とせず結合の固定性を問題としている。

まず英語における子音結合の構造がとくにせばめ音の相関において求められ、消去され、あるいは将来の可能性、蓋然性を予想することはすでに立証されている(cf. Yasui, *ibid.*)。たとえば図表5のうち、(1)閉鎖音では図表10

図表10

◎pl-	• pw-	◎pr-	◎py-
◎bl-	• bw-	◎br-	◎by-
——	◎tw-	◎tr-	● ty-
——	◎dw-	◎dr-	● dy-
◎kl-	◎kw-	◎kr-	◎ky-
◎gl-	• gw-	◎gr-	• gy-

のごとく /ptk/:/bdg/ の対立と結合の相関関係があざやかに浮きぼりされる。すなわち英語に /*tl-/ がないのは /*dl-/¹⁾ とともに構造上の欠如であり、/gw-/ と /gy-/ が極めてまれであるのはこの相関表から偶然の穴 (accidental hole) といえる。(2)同様の相関によって摩擦音も律しられるべきであるが、頭子音連結で、(a)/ð/が生じない、(b)/z/も極めてまれである、(c)逆に/s/は極めて多くの C₁ と結びつく、(d)/sr/ と /*sr/ の交換は調音の問題によるであろうが前者は頻度の点で限られている、などいろいろの条件が混合しているが、結論的に /s/+C₁²⁾、/f/+C₁ が最も安定している。(3)/hw/はいうまでもなく日常頻度の非常に高い³⁾ 生来の英語的連結であるが広く地域的、方言的ということで第二次にランクされている。(4)同様のことが C₁+/y/ についていえるが、/y/ の連結は Jones でも Kenyon-Knott でも固定していない

- 1) /tl-/ /dl-/ の欠如は [t] [d] [l] の調音点の近接による調音と認知の困難が考えられよう。
- 2) /s/+C₁ で問題となるのは /sf/ である。Jones では /sf/ が9語あがっているが、日常用いするのは *sphere*, *sphinx* の2語である。この結合は「摩擦音+摩擦音」ということで例外であるが、前章で *svelte* を保留したのはこの /sf/ との相関のゆえである。
- 3) /hw/ の頻度は前章第8図表で省略したが、Salingerで *what*, *when*, *why* などが /hw/ であるものとして測定した結果、最高の /st/ とほとんど同数の頻度(約700回)がみられた。

ので、両者の語数比較から方言分布を比較してみよう。図表11がその対照表である。この図表でもたとえば /gy/gules が一個しか生じないのは偶然の

図表11

	Jones	Kenyon
⊙ py	44	46
⊙ by	23	32
● ty	49	36
● dy	96	68
⊙ ky	53	55
● gy	1	1
⊙ fy	48	40
⊙ vy	3	1
● θy	1	1
● sy	82	(65)
● zy	2	1(1)
⊙ hy	85	95
● ly	8(63)	0
⊙ my	55	45
● ny	43	35
	592 (63)	456 (66)
● spy	5	4
● sty	12	9
● sky	5	8
● smy	0	0
● pfy	0	1
● hwy	0	1
	22	23

穴であるなど、ある程度の相関がみられるが、それよりも問題はある連結(⊙印)

は $C_1 + /y/$ が優勢であり、他の連結(●印)は $C_1 + (y)$ となるという限界である。

これは C_1 の音声的特徴によって次のごとく区別される。(cf Yasui, *ibid*, pp. 15f.)

(1) C_1 の調音点が /y/ の調音点から前後に遠ざかっている場合 ($C_1 + /y/$) /py, by, ky, gy, fy, vy, hy, my/

(2) C_1 の調音点が /y/ のそれに近接している場合 ($C_1 + (y)$) /ty, dy, θy, sy, zy, ly, ny/ 3子音についてはほとんど問題とならず /sty/ が比較的多く起るくらいである。¹⁾

以上われわれは頭子音連結の音素的構造を音声的性質との相関において検討した。配列の法則性というのも結局はこの関係において説明される。ことばが伝達の機能を果しうるのは、話し手と聞き手の間に、言語記号の安定した有限性と共通の音韻構造があるからである。2つの個人語(*idiolect*) が全く重なりあうことは不可能である。/pr-/における /p/ と

1) Kenyon のみにある *phew*, *whew* は音配列上興味深いが、これらは2子音の /pš/ *pshaw* とともに、いずれも擬声語であり、意図的な表現記号としての言語といえないであろう。また /smy/ の *smew* は両者とも発見されなかった。

/r/はそれぞれ $p_1p_2p_3\cdots$, $r_1r_2r_3\cdots$ と音声環境によって変容した多くの音群から成っている。また南部英語の /r/ は中西部米語の /r/ と同じ音価ではない。OE における /r/ も決して現在の /r/ と同一ではない。しかも伝達が果されるのは地域と歴史とを結んで /pr-/ 体系が共有され安定しているからである。筆者はさきにわれわれの分野が共時性と通時性の接点に立っているといった。いまこれらの音素配列が英語社会の中で共有され安定しているということは、それらが歴史的に伝統的に継承されてきたことを意味する。言いかえれば彼らにとって極めて familiar なものが定着してきたと考えられる。事実前記 $C_2 + /r/$, $C_2 + /l/$ 体系群は OE 以来一貫して伝承されてきた。/pr/, /tr/ など多量にラテン系の導入はあったが、それは音素構造の輸入というよりは語いの増強といえる。¹⁾ /dw/ /θw/ も語いこそ少数であるが、この伝統性という意味で /sf/ と同一視できない。

さらにまた言語音は推移するという事は長い歴史が証明しているが、英語における頭子音連結の消長をたどってみると、結論的には単純化 (simplification) の方向に向っている (cf. Bloomfield, *Language*, p. 370)。OE の /hr, hl, hn/ はすべて /h/ を消失し、/wr/ も17世紀中ば、/kn//gn/ もその後半ごろには C_2 を失った。さらに $C_2 + /y/$ や /hw/ は地域的に連結をといた。異質な連結とされる /pt-, ps-, pn-, bd-/ などのラテン、ギリシア系連結は当初から C_2 を黙字 (mute) としたと考えられる。²⁾

このように観察すれば英語における頭子音連結は決して流動変々してきたのではなく、単純化の一途をたどり、単純化が退化であるか否かは別として、いっそう安定した方向へ進んだといいうるのであろう。

以上われわれは英語における頭子音連結の有限性と、それにとまなう規則性を音韻構造の中に見だし、言語社会における頻度から親近性という面を

1) 厳密にいつて OE 以来の音素結合体系の輸入としては *school, sky, screen*, などのラテン系ならびに北方系の /sk-/ /skr-/ だけである。OE の *sc-* は /s/ であった。

2) Cf. Jespersen, *MEG*, pt. 1.

もあわせ、さらに長い歴史と伝統の中に生き残り定着してきた固有性も無視できないことを強調してきた。連結体系が「安定」しているとはこのような尺度に耐えうるものをいう。いま結論的に上記のすべての条件を具えるものを1度として、図表5、6の分布を「安定度」という基準で修正すれば次のようになるであろう。¹⁾ 図表12において(1)は上記の条件を全部²⁾ 具えて最も安定している連結、(2)は(1)に準ずるが地域の分布で流動している連結、(3)は英語の伝統的音素構造を具えているが、頻度が比較的低いもの、(4)は(1)(3)に準ずるが頻度が極めて小さいもの、(㊦)外来系であり、極めてまれにしか生じないが、結合が本来構造に合致しているもの、(㊧)外来系で音素構造も例外的

図表12

1	pr	br	tr	dr	kr	gr	fr	θr
	pl	bl	kl	gl	fl	sl		
	tw	kw	sw					
	py	by	ky	fy	hy	my		
	sp	st	sk	sm	sn			
	str							
2	ty	dy	sy	ly	ny			
	hw							
	sty							
3	dw	θw						
	šr							
	spr	skr	spl	skw				
4	gy	vy	θy	zy				
	sf							
	spy	sky						

- 1) 図表5、6において太い実線外の特殊連結は紙面の関係もあり、文字どおり目の目も見ずしてすでに消去した。したがってここではわく内の連結に限られる。
- 2) さきに /sk/ がラテン系ならびに北方系の移入と説明したが、OE時代におけることであるので問題はないとした。また、このグループの中でも頻度という面では差があるが、(3)と比較すれば確然としている。

で、まれにしか生じないが、例語が英語で比較的安定しているもの¹⁾、という段階に分かれている。

音素論にかぎらず、下部構造ではいわゆる周辺的な要素についてその帰属が問題となるが、いちおう以上が英語の頭子音連結に関する一つの解釈である。

われわれの指向するところは英語という言語体系の基本構成である。すなわち英語のもつCVC構造の解明にある。そのためには当然尾子音連結について対比的な考察がなさねばならない。母音体系の研究はそれ以上に重要であろう。しかしながら本稿をC_iのみに限定したのは結局は「安定度」という尺度にあった。C_rはもとより、母音に至ってはとうていこの尺度で計測しきれないであろう。またC_rはC_i以上に閉音節の解明には重要視されねばならない。しかしC_iとC_rとは少しくその役割りを異にし、C_rはまた別の尺度を必要とするであろうとの仮説に基づいている。C_iにとってはHockett(*Course*, p. 85)のいう“onset”としての「声立て」が必要であろうし、C_rには“coda”としてのおだやかな「声とめ」が行なわれよう。いいかえればC_iには伝達記号のinitialとしてドイツ語の声門閉鎖音(glottal stop)のような強い発信合図であることが必要であろう。そのためには限定された音構成で安定し、認知をあやまらないものでなければならない。¹⁾ C_rはこれに反して、連結体系も複雑で、同質音素の配列などを重ねつつも、おだやかな終曲として音節を閉じていく。したがって反面そこには音の省略、同化、自由変異など不安定な流動を含んでいる。

これらに関して稿をあらためねばならないが、最後にCVC体系の核音といわれる母音について一言だけしておく必要がある。筆者は英語の音節体系のルートはむしろC_i—C_rにあり、Vは其中でprominence

1) (4)の(イ)に属するものは /θy/ *thew(s)*, /spy/ *spew*. (ロ)は /gy/ *gules*, /zy/ *Zeus*, /vy/ *view*, /sky/ *skew*. (ハ)に /sf/ *sphere*, *sphinx* を含めることとした。

1) Hockett はこの連結の厳しい有限性を伝達理論における“redundancy”という考え方から支持している。(cf. Hockett, *Course*, pp. 87f.)

(cf. Jones, *Outline*, §101)をになうものであると考える。「きこえ」の最小な点からしだいに /lrwy/ と *sonorous* になり、Vの *peak* からまたしだいに下降して閉じる。このような体系を描くと、Vの位置づけはともかくとして、本稿の C_2+ /lrwy/ の安定性や、*strength* が英語国民にとって決して異常な音でないことが考えられよう。本稿の C_i 体系の考察はこれらのことを指向した「声立て」であるといえよう。

参 考 書 目

- 末尾の () 内は本文中に使用した略号
- Bloomfield, L. *Language*. George Allen, London, 1933.
- Firth, J.R. *Papers in Linguistics*. Oxford, 1957. (*Papers*)
- Fries, C.C. *Teaching & Learning English as a Foreign Language*. Ann Arbor, Michigan, 1945. (*Teaching*)
- Gleason, H.A. *An Introduction to Descriptive Linguistics*. Holt, New York, 1961. (*Introduction*)
- Hockett, C.F. *A Course in Modern Linguistics*. Macmillan, 1958. (*Course*)
- Jespersen, O. *A Modern English Grammar*. Part 1. George Allen, London, 1965 (reprinted) (*MEG*)
- *Mankind, Nation and Individual*. George Allen, London, 1946. (*Mankind*)
- Jones, D. *An Outline of English Phonetics*. 9th ed. Hefner, Cambridge, 1960. (*Outline*)
- *The Phoneme: Its Nature and Use*. 2nd ed. Hefner, Cambridge, 1962. (*Phoneme*)
- Kruisinga, E. *The Phonetic Structure of English Words*. Bern, 1942. (*Structure*)
- Pike, K.L. *Phonemics*. Ann Arbor, Michigan, 1947.
- Yasui, M. *Consonant Patterning in English*. Kenkyusha, 1962. (*Patterning*)
- 太田 朗 「米語音素論」研究社 1962
- 安井 稔 「英語学研究」研究社 1960
- Jones, D. *Everyman's English Pronouncing Dictionary*. 13th ed. Dent, London, 1967.
- Kenyon-Knott. *A Pronouncing Dictionary of American English*. Merriam, Springfield, 1953.